

## 資料紹介

ここでは、経済学部資料室収蔵の資料や、公開データベースなど、広く当室所蔵資料に関して紹介・解説する。

### 新規寄託資料

#### 辰野金吾関係資料

このたび東京大学経済学図書館に寄託されることになった「辰野金吾関係資料」は、日本における近代建築の礎を築いた辰野金吾（1854-1919）、その長男で日本にフランス文学研究を本格的に導入した嚆矢とされる辰野<sup>ゆたか</sup>隆（1888-1964）といった、近代日本の社会・文化に多大な功績を残した人物を輩出したことで知られる、辰野家に保管されていたおよそ 400 点からなる資料群である。その内容は、辰野金吾に関わるものを中心とするが、その養父・宗安のものなども多く含んでおり、江戸末期から大正にかけての辰野家を巡る公私の活動を跡付ける資料群となっている。本稿では、この「辰野金吾関係資料」の構成および寄託の経緯について簡単な紹介をおこなう。

『工学博士辰野金吾伝』（辰野葛西事務所、1926年、2-4 頁）によると、辰野の多岐にわたる足跡は、3つの方面、すなわち①「建築教育家」②「建築実務家」③「学会会長」に類別できるという。具体的には、①工部大学校教授（1884-85）、工科大学教授（1886-1902）の職にあつて、後に建築界を担う多くの俊秀を輩出し、②日本銀行や東京駅、工科大学といった数百に上る建築物を残し、③造家学会（現・日本建築学会）の創設（1886-）に尽力し、長く会長の任にあつたことを指している。また、藤森照信は、草創期の建築界とは、辰野が築いた「**自営建築家と建築業者とアカデミーの三位一体**からなる小宇宙」であり、その「**原動機**」は、教育・人材育成を担った「**アカデミー**」（大

学・学会）であったとする（『日本の建築明治大正昭和3国家のデザイン』三省堂、1979年、102-105頁）。こうした活動の成果は、こんにちでも、ヒト（弟子達）、モノ（建築物）、制度（大学・学会）といった目に見える形で誰もが確認することができるが、いっぽう、その成果が生み出される過程を示す資料群（アーカイブズ）の主なもの、東京大学工学部が（藤森前掲書に多数紹介されている）、また、その蔵書は日本建築学会が所蔵管理しており（『建築雑誌』99（1216）、1984年）、その活動に対応するように、「アカデミー」が遺された資料の主な行く先になっている。

今回、経済学図書館にもたらされたこの資料群の中にも、工部大学校の講義ノート（仮整理番号2-3-2、以下同）や学生への課題（2-2-2）、建築学会の議案書（4-5）、議院建築を巡る遣り取り（4-11）など、以上に示したような活動に関連するものも含まれてはいるが、こうした公的な足跡を直接に示す資料はそれほど多くなく、形態としては、手帳・メモや書簡といった、言わば「私」に属するタイプのものが多数を占めている。さらに、書簡の宛名を見ると、ジョサイア・コンドル（Josiah Conder, 2-2-1）、岡田時太郎（3-1-6）、下條禎一郎（3-2-1）といった著名人の名もみえるが、その多くは、養父の宗安や、妻の秀、息子隆など近親者や、鳥居義行との漢詩添削の遣り取りといった内容のものである。

換言すれば、この資料群は、日本の建築界に君臨する辰野の表の顔の背景にあつて、陰に陽にそれを支えた様々な要素を含むものとみることが

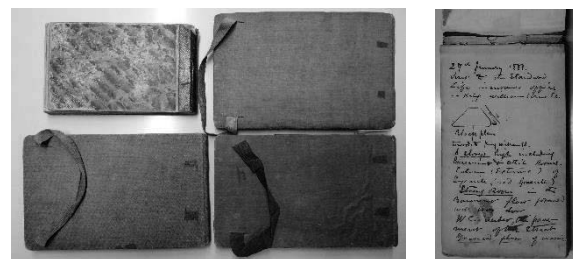


写真1 滞欧野帳（表紙・第一冊冒頭）

できる。このことは、近年、一部の研究者によって再検討がおこなわれている、欧州留学時代(1880-83)の位置づけに関する研究が、この資料群に含まれる4冊の「滞欧野帳」(2-5 写真1)を根拠として進められていることに象徴される(河上眞理・清水重敦『辰野金吾：美術は建築に応用されざるべからず』ミネルヴァ書房、2015年)。この「野帳」は、『工学博士辰野金吾伝』に一部が掲載されて以降行方不明となっていたもので、2009年に辰野の共同経営者であった葛西萬司(1863-1942)の甥の建築家横井道二の遺族宅に保管されていたことが判明し、2014年に辰野家に返還され、この資料群に加わることになった。

河上らの研究では、この資料群に含まれる「野帳」や、講演原稿(2-1)の分析から、辰野のこの時期の留学において、建築における美術との結びつきという要素が、これまでに思われていた以上に大きいものであったこと、そして、辰野に与えた影響ということでは、屢々指摘されるコンドルよりも、この滞欧時代のウィリアム・バージェス(William Burges, 1827-81)からの薫陶の方をより重視すべきことが、懇切に説かれている。こうした新資料の発掘・紹介は、それまでの辰野のイメージその安定感のある建築物や肖像画からもたらされた「辰野堅固」と渾名されるような厳めしいイメージが、ある意味で一面的なものであることを改めて思い起こさせ、その豊かな人格の内実を別の側面から照射するきっかけにもなった。たとえば、漢詩の添削原稿(3-2、4-1、4-2)は、彼の幼少期の学問的な原点が漢学の素養であったことを伝えるし、本人のものではないが、かなりの分量を占める和歌・俳句の帳面類(5-16)は、辰野家の文化的な背景に気づかせてくれる。

このほか、この資料群には、その多彩な活動の直接の痕跡となるような資料も多く含まれる。たとえば、洋行時の支払関係書類や三井銀行や横濱正金銀行の通帳(5-3、5-4 写真2)、滞在先の地

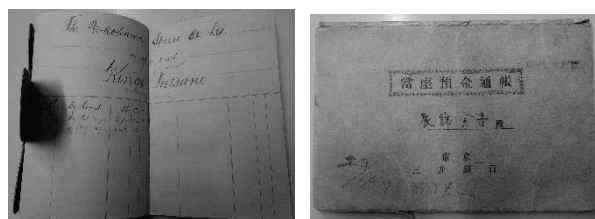


写真2 通帳（横濱正金銀行・三井銀行）

図類(4-3)といった資料は、留学時の様相を具体的に示すものであるし、宗安宛の書簡は、日本銀行の建築設計のための調査旅行時(1888-89)のものが多くを占める(3-1)。このほか、建設を巡る領収書や支払書類(1-6)、工事の予算書・仕様書(4-9)などは、事務所を構えて以降の活動の一端を示すものである。

この資料群について、もう一つ特筆しておかなければならないのは、そこに含まれるのが、辰野家という唐津の下級藩士の家の由来(1-8)、経歴を示すものでもあるということである。この資料群が「辰野金吾関係資料」と名付けられた所以である。これには、江戸詰の藩士であった、養父・辰野宗安の遺した藩政関連の文書類、書簡、各地を巡った際の日記(1-4、1-7)が含まれている。

辰野金吾の曾孫にあたる建築家の辰野智子さんから、日本銀行金融研究所を介して、資料寄託の照会があったのは2018年末のことであった。翌2019年は、その没後100年にあたり、これを記念する展示が相次いで開催されたり(日本銀行「辰野金吾と日本銀行」、東京ステーションギャラリー「辰野金吾と美術のはなし」、伝記小説が発表されるなど(門井慶喜『東京、はじまる』文藝春秋、2020年)、この日本近代を築いた人物への世の注目が再燃した年であったと言える。

この年は、実は、東京大学経済学部が創設されて丁度100年目にあたる記念の年でもあった。こうした歴史を画する時期に、この資料群の寄託を受けることになったという事実には、深い因縁を思わずにいられない。本資料群は、日本の近代と

いうものをその表裏両面から検証していく上で、またとない素材となるであろう。資料のさらなる活用を期待したい。

謝辞 貴重な資料を、広く世に公開する可能性を開いてくださった、辰野家の皆様に心より御礼申し上げます。  
(助教 矢野<sup>やの</sup>まさたか)

## 新収資料

### 満洲国新旧紙幣見本帖

この資料は満洲中央銀行が作成したもので、正確には『舊紙幣様本帖』、『紙幣様本帖』という2冊の貼り込み帳(帖)からなる。様本とは見本の意味であるから紙幣様本とは紙幣見本(見本券)のことを示している。

見本券は、中央銀行が真贋鑑定の根拠として業務用に作成し、通行紙幣の真贋確認のために各支店等に配布される。これら見本券を台紙に貼り付けて、綴じてアルバム状にしたものが紙幣見本(様本)帖と呼ばれるものである。

見本券は、通行券と同じ材料を用い、加工も同一である。ただし、印刷に関しては通行券と異なり、片面のみ印刷され、二面あるうちの一面は白紙となっている。表面には見本(様本)の文字を印字し、パンチで数カ所穴を開けるのが通例である。このような見本券は通行券に比べれば一般に流通する機会は限られている。

この見本帖は、元陸軍主計大佐で、戦後は宮崎県飯野町(現在のえびの市)の町長を務めた秋丸次朗(1898-1992)旧蔵のものである。2019年8月にご子息である秋丸信夫氏より寄贈を受けた。

秋丸次朗は、秋丸機関として知られる経済謀略機関(陸軍主計課別班)を率い、有沢広巳らの経済学者を動員して、日本、アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリアなどの戦争遂行・継続能力を、経済的な観点から分析した。

その成果の一つが『英米合作経済抗戦力調査』であり、日本の敗戦を予測したために秋丸機関は

解散、報告書は焼き捨てられたとされていた。有沢の死後、その旧蔵書中から報告書の其一が見つかり、さらに数年前に撰南大学准教授の牧野邦昭氏が其二を発見し、報告書の詳細な分析が進んだことで秋丸機関じたいの歴史的評価も変わりつつある<sup>1)</sup>。

秋丸機関を組織する直前まで、秋丸次朗は関東軍経済参謀として満洲の地にいた。この見本帖の中の最も新しい年代の紙幣は1938年のものであるから、1939年に東京に赴任するにあたり、入手してきたものであろう。

満洲国建国当初、中国東北部では、東三省官銀号、吉林永衡官銀錢号、黒龍江省官銀号の省立中央銀行のほか、張作霖・張学良による辺業銀行の4行が紙幣を発行していた。このため券種15、価値種136の銀行券と、雑多な金・銀・銅が経済活動に使われていた<sup>2)</sup>。1932年に設立された満洲中央銀行に課された最初の課題は、これら4行を併合して統一紙幣を発行することであった。

二つの見本帖のうち、『舊紙幣様本帖』は満洲における統一紙幣発行前に使用された、上記4銀行の紙幣83種を見本として貼り付け、新紙幣との交換比率を明記したものである。このため、見本券といっても前述したようなものではなく、通行紙幣に見本のスタンプを捺したり、穴をあけたりし、もしくはそのままの状態で貼り付けたものである。

一方の『紙幣様本帖』は満洲中央銀行が最初に発行した甲号券5種と、その後にデザインを変更して発行した乙号券5種のものである。秋丸次朗が満洲を去った後に発行された丙号券や丙号改造券、丁号券などの見本は貼付されていない。

『舊紙幣様本帖』は国内の図書館等にも存在が確認されており、インターネット上のオークションなどでも出品されているのを見かけることがある。筆者はこの全てを見たわけではないが、いくつもの種類がある。また『紙幣様本帖』につい

ては全く同じものを管見の限り知り得ない。これらについては今後、順次調査をしてゆきたい。

『英米合作経済抗戦力調査』が取り持つ縁により、1996年には経済学図書館に秋丸次朗旧蔵の図書や記録類（62点）が寄贈されている。いままた当室に本学部所蔵資料と因縁浅からぬ貴重な資料を受入れることができたのは、望外の喜びである。今回、寄贈を快諾いただいた秋丸信夫氏と、受入れにあたって、仲介をいただいた牧野邦昭氏にこの場を借りて厚く御礼申し上げたい。

#### 『舊紙幣様本帖』貼付紙幣一覧

1. 東三省官銀號發行兌換券（7種：壹百圓、拾圓、伍圓、壹圓、伍角、貳角、壹角）民國18年12月
2. 東三省官銀號發行哈爾濱大洋票（6種：拾圓、伍圓、壹圓、貳角、壹角、伍分）民國10年4月
3. 東三省官銀號發行滙兌券（5種：壹百圓、伍拾圓、拾圓、伍圓、壹圓）民國13年10月
4. 遼寧四行號聯合發行準備庫發行兌換券（2種：拾圓、伍圓）民國18年5月
5. 奉天公濟平市錢號發行銅元票（5種：銅元壹百枚、銅元伍拾枚、銅元貳拾枚、銅元拾枚、銅元伍枚）民國7年3月
6. 邊業銀行發行兌換券（6種：拾圓、伍圓、壹圓、伍角、貳角、壹角）民國14年4月
7. 邊業銀行發行哈爾濱大洋票（6種：拾圓、伍圓、壹圓、伍角、貳角、壹角）民國14年4月
8. 吉林永衡官銀錢號發行大洋票（7種：拾圓、伍圓、壹圓、伍角、貳角、壹角、伍分）民國15年10月
9. 吉林永衡官銀錢號發行哈爾濱大洋票（3種：拾圓、伍圓、壹圓）民國12年11月
10. 吉林永衡官銀錢號發行小洋票（7種：伍拾圓、拾圓、伍圓、壹圓、伍角、貳角、壹角）民國7年8月

11. 吉林永衡官銀錢號發行官帖（7種：壹百吊、伍拾吊、拾吊、伍吊、參吊、貳吊、壹吊）民國17年
12. 黒龍江省官銀號發行大洋票（5種：拾圓、伍圓、壹圓、貳角、壹角）民國13年2月
13. 黒龍江省官銀號發行哈爾濱大洋票（5種：拾圓、伍圓、壹圓、伍角、貳角）民國13年2月
14. 黒龍江省官銀號發行四釐債券（3種：拾圓、伍圓、壹圓）民國13年10月
15. 黒龍江省官銀號發行官帖（9種：壹百吊、[伍]拾[吊]、參拾吊、貳[拾吊]、[拾吊]、[伍吊]、[參]吊、[貳吊]、[壹吊]）民國8年3月～18年1月

#### 『紙幣様本帖』貼付見本券一覧

1. 甲號様本券（5種：壹百圓、拾圓、五圓、壹圓、五角）大同元年11月10日～大同2年6月1日
2. 乙號様本券（5種：百圓、拾圓、五圓、壹圓、五角）康德2年11月1日～康德5年7月1日

#### 【註】

- 1) 牧野邦昭『経済学者たちの日米開戦：秋丸機関「幻の報告書」の謎を解く』新潮社、2018
- 2) 『日本紙幣収集辞典』原点社、2005、p485  
（講師 こじまひろゆき 小島浩之）

#### 新規公開資料

##### せいふしんぎかい 政府審議会コレクション（1）

経済学部資料室には、これまで政府審議会等に関与した教員より寄贈された各種資料が保存されてきた。審議会の資料のうち最終的な議事録については、国立公文書館に移管されているものも多いが、会議ごとに配布された資料など、審議経過における資料類は逆に保存されていない。

経済学部資料室では戦後の審議会資料に関して、できる限り会議ごとのまとまりを崩さぬように保存してきた。ただし、内部用に製本された冊子状の資料（いわゆる白表紙）については、一般

資料と同様に経済学図書館の書庫に分類配架していた時期もある。

当室では審議会資料について、過去の我が国の政策決定過程を検証できる貴重な資料であると判断している。そこで、2010年の開室以来、図書館書庫に配架されたものを含めて、審議会資料の取り扱いについて検討を重ねてきた。その結果、著作権法上問題のないもので、公文書管理上、十分な時の経過を経たと考えられるものについて、デジタル公開の準備を進めている。

本稿ではこのうち資料室が原本を所蔵するもので、2018年度にデジタル撮影を実施し、2018年度から2019年度にかけて公開したコレクションについて、簡単に内容を紹介したい。

なお、今回公開した資料はいずれも、第二次大戦後の復興期における政策決定プロセス、実際の経済活動や各種制度の詳細を伝える第一級の歴史資料である。

**有沢資料**：本学部名誉教授の有沢広巳（1896-1988）旧蔵の、政府審議会や戦後経済政策決定関係の資料や、関連する原稿・草稿類からなる。なかでも、太平洋戦争前に陸軍の命により英米の戦力を経済力の観点から分析した『英米合作経済抗戦力調査（其一）』と、戦後の傾斜生産方式に関する資料は、1990年代には当時の経済学部図書館で利用に供されており（後述する系統③の資料）、よく知られている。2010年の資料室開室にあたって、これらも特別資料に指定され、図書館から資料室へと管轄が変更になっている。

有沢資料はその寄贈の経緯から以下の4系統に分かれる。

- ① 有沢の生前に『資料・戦後日本の経済政策構想』全三巻（東京大学出版会、1990-1995）を出版するため、東京大学出版会へ持ち出され、出版終了後（有沢没後）に寄贈されたもの<sup>1)</sup>
- ② 有沢の没後に有沢図書<sup>2)</sup>とともに寄贈され

たもの

- ③ 1993年に整理・公開されている傾斜生産方式や、東大での講義に関する資料および『英米合作経済抗戦力調査（其一）』
- ④ 1990年に寄贈された原稿等を含む資料類

このうち、①の数量は72帙（1,464件<sup>3)</sup>にのぼる。このうち精選したものが、前掲『資料・戦後日本の経済政策構想』に収録されている。また近年、全点をデジタル化して、丸善雄松堂からDVDにて有償頒布している<sup>4)</sup>。

②と④は未整理のまま合計51箱あったものを整理し（8,486件）、現在、デジタル化を進めつつある。このうち社会政策とエネルギー政策に関するものは、2019年度より丸善雄松堂のオンラインデジタルアーカイブ J-DAC から公開をはじめた（有償<sup>5)</sup>）。これらの詳細については、宮崎忠恒氏による詳細な解題を参照されたい<sup>6)</sup>。

③は57簿冊あり、『英米合作経済抗戦力調査（其一）』のみデジタル公開されていたが、残りの部分についても、「政府審議会関係コレクションデジタル保存プロジェクト」（代表：小島浩之、平成30年度東京大学デジタルアーカイブズ構築事業）によりデジタル化を実施した。一部、権利関係の問題により公開できないものを除き、Engel（社会経済関係資料目録&デジタルアーカイブ検索）<sup>7)</sup>および東京大学 OPAC から検索・閲覧が可能である<sup>8)</sup>。

おおきた  
**大来資料**：戦後を代表するエコノミストの一人であり、大平内閣の外務大臣も務めた大来佐武郎（1914-93）が、官僚時代に関わった政策立案に関する資料287件からなる。第二次大戦前、大来は通信省、興亜院、大東亜省の官吏として勤務し、終戦後の1945年8月からは外務官僚となった。1946年に経済安定本部ができるまで外務官僚の身分のままで、石炭小委員会の書記役となって傾斜生産方式の立案に参画した。翌年6月には経済安定本部総裁官房調査課長となり<sup>9)</sup>、数々の調査資

料や『経済白書』の編纂に携わり、戦後日本の経済復興に深く関わった。

この資料群は、大来の外務官僚時代の資料がほとんどを占める。なかでも石炭小委員会の資料は重要で、前掲『資料・戦後日本の経済政策構想』第二巻の所掲資料は、ほぼ大来資料から採られている。経済政策に関する有沢広巳からの書簡も含まれるなど、有沢資料と表裏一体の関係にある。**中川資料**：エコノミストで日本銀行理事や野村総合研究所社長を務めた中川幸次<sup>ゆきつぐ</sup>（1920-2015）の旧蔵資料 90 件からなる。中川は、経済復興計画策定のために、GHQ の指令により 1948 年 5 月に発足した経済復興計画委員会の事務局員となっている。本資料群は大半がこの時期のもので占められており、これまでの資料同様に『資料・戦後日本の経済政策構想』の典拠資料の一つとなっている。

**有江資料**：わずか 12 件からなるこの資料群は、袋に「有江様資料」とだけ書かれており、旧蔵者の記録が残っていなかった。資料のうち 9 件が 1945 年から 1946 年にかけての外務省調査局もしくは総務局、残り 3 件が経済安定本部発行であり、表紙に「有江→浅田」や「大来」と鉛筆書きされているものがある。これらから、有江は大来佐武郎と関係の深い人物であることが想起される。ここで、旧蔵者として浮かび上がるのは、経済官僚であった有江三郎（1923-）である。有江は官僚として「興亜院→大東亜省→外務省→経済安定本部→経済企画庁」という、大来とほぼ同じルートを辿っている<sup>10)</sup>。この点も、上述の推測を裏付ける傍証となる。

大来資料・中川資料・有江資料はいずれも、「政府審議会関係コレクションデジタル保存プロジェクト」によりデジタル化を実施し、一部を除いて、Engel（社会経済関係資料目録&デジタルアーカイブ検索）を通じて公開している。

#### 【註】

- 1) 原朗「有澤廣巳」『近現代日本人物史料情報辞典』[1]（吉川弘文館, 2004）で言うところの「東大保存資料」とは、この①の資料群を指す。
- 2) 有沢広巳旧蔵の洋書で東京大学経済学図書館に寄贈されたものを指す。なお有沢旧蔵の和書については、中国社会科学院日本研究所図書室に寄贈され、有沢文庫と名付けられている。
- 3) ここでいう件数とは、アーカイブズとしての採録単位としての件数のため、包紙なども 1 件としてカウントされている（以下同）。これに対して、帙や簿冊などは数件を一括りとした保管の単位として用いている。
- 4) 『東京大学経済学部所蔵有沢資料：戦後復興期経済政策資料集』DVD（3 枚組），丸善, [2016]
- 5) 「有沢広巳旧蔵オンライン版社会政策・エネルギー政策関係資料集」<<https://j-dac.jp/ARISAWA/index.html>>（2020.03.17 最終確認、以下同）
- 6) 宮崎忠恒「有沢広巳旧蔵社会政策・エネルギー政策関係資料集解題」<[https://j-dac.jp/ARISAWA/arisawa\\_kaidai.pdf](https://j-dac.jp/ARISAWA/arisawa_kaidai.pdf)>
- 7) [https://www.i-repository.net/il/meta\\_pub/G0000381shamoku](https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000381shamoku)
- 8) 東京大学 OPAC<<https://opac.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/>>から検索の場合、詳細検索画面から検索オプションの文庫区分で「有沢資料（経）」を選択して、検索ボタンをクリックすると有沢資料の一覧が表示される。それぞれの書誌において登録番号の横のアイコン（**Link**）をクリックすることでデジタルアーカイブの閲覧が可能である。
- 9) 大来佐武郎の経歴は、浅井良夫「大来佐武郎年譜」<[https://j-dac.jp/OKITA/okita\\_history.pdf](https://j-dac.jp/OKITA/okita_history.pdf)>および浅井良夫『経済安定本部調査課と大来佐武郎』（成蹊大学経済研究所，1997）を参照した。
- 10) 有江三郎については、前掲註 9 浅井『経済安定本部調査課と大来佐武郎』に聞き取り調査の記録や略歴が載せられており、これらを参考にした。

こしまひろゆき  
（講師 小島浩之）